投映法としての「星と波描画テスト」の性質
—11年後の追跡調査—

The features of the Star-Wave Test as a projective method
—The Report from Re-test to be taken after eleven years since the first administration—

香月 菜々子[1]
[1]大妻女子大学人間関係学部人間関係学科

Nanako Katsuki[1]
[1]Faculty of Human Relations, Otsuma Women's University
2-7-1 Karakida, Tama City, Tokyo, Japan 206-8540

キーワード：投映法，星と波描画テスト，ロールシャッハ・テスト
Key words：Projective methods, Star-Wave-Test, Rorschach Test

抄録

星と波描画テストの投映法としての性質をより明らかにするため，本研究は基礎的研究の一環として，先行研究（香月，1999）の調査協力者6名を対象に，星と波描画テストおよびロールシャッハ・テストの再施行を実施し，主に指標レベルで，過去データとの比較検討を行った．その結果，星と波描画テストは，描き手の流動的な状態像を映し出すばかりでなく，描き手における比較的安定性の高いパーソナリティ要素についても映し出す可能性が示唆された．また両テストの結果を照合したところ，パーソナリティ要素の変化についての見解が一部共有されていることが分かった．詳細を明らかにするための研究が今後期待される．

1．はじめに

1.1. 星と波描画テストとは？

星と波描画テスト（独 Der Sterne-Wellen Test）は，1970 年代にドイツの心理学者 Avè-Lallemant, U.によって開発された,課題描画テスト／描画法である[1]．「海の波」の上に「星空」という原初的なモチーフを描くことで，描き手内部で展開する主観的な体験世界が視覚像として用紙上に映し出され，日常的な枠組みにとらわれることなく,描き手本来の自由な応答が可能になると考えられている．時間制限がなく,あくまで描き手自身のペースで取り組めるのも特徴の一つである．

日本では 1990 年代に小野（1996，1998）[2] [4] をはじめ，Rhyner（1997）[3]，杉浦ら（1998）[5]，によって紹介され, 2015 年現在に至るまで, 教育，医療，司法をはじめとするさまざまな心理臨床の現場において，主として「投映法」としての活用がみられる．描き手の認知的側面・情緒的側面の特徴を映し出すほか，描き手個人の心理的課題や葛藤の所在，病理の可能性を示唆するなど，パーソナリティの理解に大きく寄与している．さらには繰り返し施行することで精神的不調からの回復過程の振り返りを可能にするなど，国内外の心理臨床の現場で広く指摘されている[3] [4] [5] [6] [7] [8] [9] [10]．

心理臨床の現場で本テストを施行すると，テーマの性質上，描くことへの抵抗が生じにくく，描き手の取り掛かりがスムーズである点が注目される．用紙も他の描画テスト・描画法に比べるとコンパクトであるため（枠が印刷されたＡ５の用紙を使用）描き手の負担が少ないといった特徴があり，心理面接の流れを妨げることなく施行できる点は有用であり[8], 心理療法導入期における描き手とセラピストの関係づくりの一助としても役立てられている．

1.2. 星と波描画テストの性質について

星と波描画テストの解釈仮説として，創案者の Avè-Lallemant（1979）[1]は，描き手がいま世界をどのように体験しているのか，すなわち描き手の体験様式や体験世界が映し出されると述べている．

例えば星と波描画テストと同様に自然風景の描写が課題であるバウムテストの場合，描く用紙を描き手の周辺環境に見立てて，その環境の中に位置づけられたいわば「自己の全身像」を体験し連想すると説明される．星と波描画テストの場合，描き手の内的な世界体験を連想していると，彼女は自らの臨床経験から明らかにしており，これを支持する意見として，リーネル（2000）[11]は「星と波テストはクライエントの＜世界＞に対する無意識的態度と固有の関係について明らかにする」と著書の中でまとめている．しかしこれらの知見はいずれも，検査者の経験に基づく主観的な見解であり，パーソナリティ・テストとしての本テストの性質の検証や，本テストが被検者の特性を本当に反映していると言えるのかどうか，すなわち本テストの基礎的研究による裏付けが未だ少ないのが現状である．そうした状況を鑑みて，本テストの基礎的研究が徐々に進められることとなった[12] [13] [14] [15] [7] [8].

ところで，投映法の基礎的研究のテーゼとして，Frank（1939）[16]は「（投映法の）妥当性・信頼性の確立のためには，ある投映法から得られた所見が，他の投映法からの所見，典型的な心理テストからの所見，生活史のような個人について収集された資料の所見と合致するかどうかの研究が望ましい」と述べていることは，すでによく知られている．投映法研究の方法論をめぐっては賛否両論あるが，香月（1999）[12]および香月ら（2003）[6]は Frank の見解を支持し，星と波描画テストが“描き手の何を捉えていると言えるのか”という問題意識のもと，その性質をより客観的な視点から明らかにし解釈の幅を広げる試みとして，臨床的妥当性を有する片口法（修正 Klopfer 法）のロールシャッハ・テスト（以下，ロ・テスト）との比較を試みた．結果，星と波描画テストが少なくとも以下の 8 つのパーソナリティ特性を捉える事が可能であると報告されている：

①具体的な対人的側面を捉える事は困難である
②描き手の情緒体験を敏感に反映する
③描き手が想起する具体的な観念内容や認知の偏りを捉えることは困難である
④ある一面が拡大的に映し出されることがある
⑤外界に影響されない，より純粋で本質的な本人独自の世界を捉える事が可能
⑥描画であるがゆえに他の投映法より表現形式や特徴を明白に映し出す傾向がある
⑦自我機能の詳細をこまかく捉えることが困難である
⑧検査者に描き手の体験の追体験を促す

いずれの見解も，すでに臨床実践では馴染み深いものだが，他の投映法との比較研究により生じた結果であり，経験的な知が客観的な視点によって補われたという点で臨床的妥当性が支持された例ではないかと考えられる．なかでも②の「描き手の情緒体験を敏感に反映する」については，従来の Avè-Lallemant の見解を支持しており，日常の臨床感覚ともよく符合することから，このテストの独自性を考える上で特徴的な部分として注目されている．その後の包括システムのロ・テストとの比較研究においても情緒的様相を映し出すと指摘されるなど[17]，更なる研究が期待されるところである．

しかしこれまでの一連の研究の中で，本テストが映し出す描き手の特徴というものが，果たして一過性の特徴すなわち状態像であるのか，それとも描き手の永続的な性質であるのかについての検証は，ほとんど行われていないのが現状である．

本テストを臨床実践で用いる際，筆者の場合，クライエントとセラピスト間で回復過程を振り返るためのフォローアップ・ツールとして活用することが多いが，フィードバックの折に，描画面上に表出される特徴が一過性のものなのか，それともパーソナリティの核とも言うべき比較的変化しにくい性質なのか，判断の指針が必要と感じる場面は少なくない．作者 Avè-Lallemant は，主に筆跡の特徴から，本テストに立ち現われてくるのは描き手の一時的な特徴と強調する傾向があるのに対し，Yalon（2006）[7]は同じく筆跡の特徴から，描き手の特徴としてより長期にわたってとどまる性質，いわば性格的な要素も反映されると主張するなど，研究者により見解が分かれるところである．

２．目的

そこで本研究では，本テストの性質をより明らかにするために，投映法の再施行法（再テスト法）を中心に検討を進めていきたい．具体的には，先行研究（香月,1999）[12]の調査協力者を対象に，11 年の長期インタバルを経て，再び星と波描画テスト，およびロ・テストを施行する．今回の結果と過去データとの比較を通じて，描画上の特徴の変化の有無を手掛かりに，星と波描画テストがパーソナリティの何を映し出す可能性があるのかにつ

いて，その仮説を浮き彫りにすることが本研究のねらいである．またこれらの仮説の見解を支えるものとして，臨床的妥当性を有する投映法であるロ・テストの知見を参考にすることで，本テストが捉えた特徴がパーソナリティ全体のうち，どの領域を示す可能性があるのかについて検討したい．

３．方法

3.1. 調査期間

2010 年 7 月から 2011 年 3 月

3.2. 調査場所

大学の小会議室

3.3. 調査協力者

先行研究において，調査協力者として研究に参加した一般大学生 55 名（平均 20.27 歳，SD=1.24）に対し本研究への協力を呼びかけたところ，6 名（男女比 3：3，平均 30.16 歳，SD=1.16）の参加協力を得た．調査実施時，彼らは社会人経験者もしくは現役社会人（会社員，専門職ほか）であり，事前インタビューより心身の健康状態も良好であると見受けられたため，健常群とみなし，調査を進めることとした．

調査に先立ち，本研究の目的，実施内容および方法，実施に伴う危険性，不利益，結果発表の方法，およびプライバシーの保護，研究に不参加であっても不利益が生じないこと，また同意後の撤回がいつでも可能であること，相応の謝金があること等を書面で説明した．そのうえで，書面により研究同意を得たものを調査対象とした．

3.4. 手続き

先行研究と同様，調査協力者を対象に星と波描画テスト，そしてロ・テストの順で，筆者が個別に施行した．

3.5. テスト結果の処理について

両テストの分類および解釈を，筆者が担当した．

星と波描画テストについては，テスト創案者 Avè-Lallemant の指導を受けた専門家 1 名の助言をもとに，解釈を検討した．

ロ・テスト（包括システム）におけるコーディングおよび解釈については，専門家 1 名にスーパーヴィジョンを依頼し，パーソナリティ理解のための検討を重ねた．コーディングおよび解釈の面で，両者の間に意見の違いが見られた場合には，時間をかけて協議を行い，より妥当と判断される解釈を採用した．

４．結果

4.1. 星と波描画テストの結果について

星と波描画テストの結果は，表 1～8 に示されたとおりである．

4.1.1. 所要時間について

表 1 は各回の平均所要時間が示されている．1 回目と 2 回目の施行とでは，所要時間に統計的に有意な差は見受けられなかった．

表 1．描画所要時間の比較

（平均：秒／SD）

1回目（1999）	2回目（2010）	t値（注1）
234.17／91.99	241.83／98.13	0.821

（注1）t検定による有意差　***p<.01、**p<。05

データの内訳によれば，2 回目の所要時間が 1 回目よりも長くなった調査協力者は 6 名のうち 3 名であり，中には前回の 2 倍以上も時間をかけて描写した方も見受けられた．先行研究では，青年期健常群において，描画に長く時間をかけることが明らかになっており，心的エネルギーの豊かさや生産性の高さ，集中力の持続との関連性が指摘されている [8]．本研究は同一人物を対象とした再施行であり，「20 代の自分」と「30 代の自分」の比較となるため，個人における身体的および精神的な成長・成熟のプロセスとの関連性が考えられる．

一方，そのほかの 3 名は，2 回目の所要時間が 1 回目よりも短くなっているのが特徴であるが，この 3 名はいずれも，1 回目の施行時に描画課題への取り掛かりに時間を要し，慎重であるがゆえに修正行動が多く見られた点が共通していることが分かった．新奇場面への参入が困難に感じられた可能性が考えられる．2 回目の施行ではスタートからスムーズな描写が見られ，落ち着いた態度で終始取り組んでいる様子が見受けられたため，結果的に所要時間が短くなったのだろうと考えられる．

4.1.2. 解釈項目別比較について

表 2 は Avè-Lallemant による分析解釈の基準に基づき，「絵の分類」「空間の構成形式」「空間の使い方（垂直軸・水平軸）」「付加物」の出現率が示されている．1 回目と 2 回目を見比べることで，出現率の全体的な推移が把握できるようになっており，各項目で最も高い出現率を示す数値に二重線が付けられている．

表 3 は，表 2 において各項目に最も高い出現率を示した描画特徴を概観と題して一覧表にまとめたものである．1 回目の施行と 2 回目の施行とを比較すると，「空間の使い方（垂直軸）」以外の解釈項目においては，最も高い出現率を示す描画特徴が変化していることが分かった．以下，解釈項目ごとにその変遷を見ていきたい．

a）「絵の分類」について

星と波描画テストに限らず，描画を解釈する際にまず大切なことは，描かれた作品の全体的印象をつかむという視点である[18][19]．本テストの解釈手順の第一段階では，まず絵全体を見つめる「絵の分類」が求められるが，この方法は描画を解釈するうえで理に適っていると言える．この段階で捉えられた全体的な印象を解釈の基盤とすることで，そのあとに続くさまざまな知見を統合させるのに役立ち，部分的な特徴に偏ることなく，解釈を進めることができると考えられるからである．

絵の分類は「要点のみのパターン（以下，要点のみ）」「絵画的なパターン（以下，絵画的）」「感情のこもったパターン（以下，感情のこもった）」「形式的なパターン（以下，形式的）」「象徴的なパターン（象徴的）」の 5 種のパターンによって成り立ち，一つの描画に一つのパターンが当てはまるとは限らず，場合によっては複数以上のパターンが該当する場合もある．

表 2 は，「絵の分類」のパターンごとの人数の推移が示されている．形式的なパターンについては，今回の調査協力者のいずれの描画にも見受けられず，その他のパターンについては該当者が見受けられた．

表 2．各解釈項目の出現率（注 2）

（単位：%）

解釈項目		1回目（1999）	2回目（2010）
絵の分類	要点のみのパターン	37.5 (3)	12.5 (1)
	絵画的なパターン	12.5 (1)	37.5 (3)
	感情のこもったパターン	25.0 (2)	37.5 (3)
	形式的なパターン	0	0
	象徴的なパターン	25.0 (2)	12.5 (1)
空間の構成形式	自然の調和	16.7 (1)	16.7 (1)
	並置	33.3 (2)	33.3 (2)
	規則性	33.3 (2)	0
	不調和	16.7 (1)	50.0 (3)
空間の使い方（垂直軸）	空の優位	83.3 (5)	66.7 (4)
	海の優位	16.7 (1)	33.3 (2)
空間の使い方（水平軸）	強調なし	50.0 (3)	33.3 (2)
	左側の強調	0	33.3 (2)
	右側の強調	16.7 (1)	50.0 (3)
	中央の強調	33.3 (2)	0
付加物	なし	83.3 (5)	42.9 (3)
	自然物（生物、浜辺など）	16.7 (1)	42.9 (3)
	人工物（船、建物など）	0	14.3 (1)

（注 2）度数を項目ごとの全体個数で除したものを%にて表示・（　）内は人数

表 3.星と波描画テスト上の描画特徴の概観

解釈項目	1回目（1999）	2回目（2010）
絵の分類	要点のみのパターン	絵画的なパターン 感情のこもったパターン
空間の構成形式	並置・規則性	不調和
空間の使い方（垂直軸）	空の優位	空の優位
空間の使い方（水平軸）	強調なし	右側の強調
付加物	なし	なし・自然物

表 3 を見ると，1 回目の施行では「要点のみ」が最も多く見られていたが，2 回目の施行では「絵画的」および「感情のこもった」の出現率が多く見られ，「絵の分類」に変化が生じたことが明らかとなった．

表 4.「絵の分類」の変化

（単位：人数）

絵の分類（1999→2010）		計
変化なし	「要点のみ」　→「要点のみ」	1
	「絵画的」+「象徴的」　→「絵画的」+「象徴的」	1
	「感情のこもった」　→「感情のこもった」	1
変化あり	「要点のみ」　→「絵画的」	1
	「要点のみ」　→「感情のこもった」	1
	「感情のこもった」　→「絵画的」+「感情のこもった」	1

表 4 は，「絵の分類」の変化の様子が具体的に示されているが，変化したケースを中心に見ていくと，本研究では 1 回目に「要点のみ」から変化したケースが 2 例，しかも「絵画的」「感情のこもった」を描くなど，パターンに広がりが見られることが分かった．それ以外についても「感情のこもった」から「絵画的」＋「感情のこもった」など，より複雑できめの細かい表現に変化したほか，描画表現に含まれる情緒的要素が増えており，いわば“その人ならでは”の個性的な表現が見られるように変化してきていることが分かった．

先行研究をひもとくと，例えば青年期の健常群と臨床群の比較研究の中では，健常群では「絵画的なパターン」「感情のこもったパターン」が臨床群に比べて多く見られることが指摘されている[8]．さらに青年期の精神的不調を有する者を対象とした研究では[20]，回復の兆しの一つとして，描画という媒体を通じて自分自身を表現することや，情緒的に豊かな体験を他者と共有しようとするなど，社会・世界と関わっていくことにより積極的になる態度が見受けられると指摘され，活き活きとして情緒的に豊かな印象を与える描画が自ずと増えてくると指摘されている．本研究の結果を受けて，健康な成人においては，こうした心の動きが歳を重ねるごとに増していく傾向があり，いわば 20 代から 30 代にわたる「成熟のプロセス」の一例と読み解く可能性も示唆される．

また，本研究では香月（2006）[20]と同様に，調査協力者において「絵画的」や「感情のこもった」といった特徴的で表現豊かな描写から，「要点のみ」に代表される簡潔な描写へと変化するパターンが一切見受けられなかったという点も特徴的であった．本研究は残念ながら調査対象者が少なく，統計的手法による検討が難しいため，一般化はできないが，「要点のみ」というのは初回に表出しやすいごく一般的な“構え”であり，教示に対して単純な反応としての記号的な表現である可能性が考えられる．最初の描画は「要点のみ」だとしても，2 回目以降は次第に創意工夫やオリジナルな表現を行うようになるなど，自ずと表現要素が増えるため，結果的に「要点のみ」以外の表現型へと移行する流れが指摘される．

一方，「絵の分類」に変化が見られなかった 3 名だが，星と波描画テストの仮説をもとに考えると，世界に対する内的構えや体験様式が変わらずに保持されており，細かい要素にのみ若干の変化が認められるようであった．人間のパーソナリティ要素のなかには，相当の時間的経過を経た後であっても，変わらずに残る性質，変わりにくい性質というものが，確かにあるように思われる．パーソナリティについて考える上で，興味深い知見である．

b）「空間構造の形式」について

表 2，表 3 をみると，1 回目では「並置」および「規則性」が最も高い出現率を示しているが，2 回目になると「不調和」に座を譲っていることが分かる．また，1 回目の施行で見られた「規則性」は 2 回目のときには姿を消し，すべて別の形式へと変化している点が注目される（表 2, 表 3, 表 5）．

表 5.「空間構造の形式」の変化

（単位：人数）

空間構造の形式（1999→2010）		計
変化なし	「調和」　→「調和」	1
変化あり	「並置」　→「不調和」	2
	「規則性」→「並置」	1
	「規則性」→「不調和」	1
	「不調和」→「並置」	1

「規則性」とは Avè-Lallemant 曰く，自己訓練による自己管理の表現であるとみなしており，構造上，自らの感情表現があまり含まれていないと解されるのが特徴的である．描き手由来のペースやルールに従って描かれているのではなく，むしろ外側のルールに従順であると考えられるため，場合によっては強迫的な傾向も見て取れるものである．20 代から 30 代へのプロセスにおいて，自分

自身のやり方を踏襲するように変化した，と考えられるであろうか．またこれとは逆に，30 代の描画において「不調和」が数の上で増えているように見えるが，これはいずれのケースも付加物（陸地・砂浜など）を描きこむことによって生じた空間構造の変化であることが分かった．この場合の「不調和」は従来通り葛藤のサインと理解できると同時に，自己表現に積極的な姿勢が示されるようになった結果であるとも考えられる．陸地は，自分自身の心のうねり，中でも情緒的側面との間にやや距離を置いて冷静を保とうと，安全地帯を設けて体制を立て直ししているとき，あるいは小休止を必要としている時にみられるのではないかと，筆者自身は考えている．臨床実践において本テストを用いる際，描き手の問題がひと山こえたところで施行を行うと，こうした表現によく出会うことがある．その意味では，描き手は 30 代に達した今，ここでひと休みして来し方を振り返り，砂浜に腰を落ち着け，海の波を眺めながら行く末を見つめているかのようにも見えてくる．それぞれのケースでどのような文脈で「陸地」が登場し，また今後こうした表現はどのように変わっていくのか，注目される．

c）「空間の象徴的な使い方」について

空間の象徴的な使い方には，垂直軸（上・下）と水平軸（左・右・中央）の 2 通りの視点がある．

まず垂直軸であるが，表 2 を見ると「海の優位」および「空の優位」ともに，1 回目と 2 回目とでごくわずかな変動にとどまっている．表 2 および表 3 を見ると，1 回目の施行と 2 回目の施行とが，いずれも「空の優位」の出現率が高いことが分かった．

少々大胆な言い方をすれば，本テストは画面の構造上，空の領域と海の領域は二つに分かれてせめぎあうような格好で，均衡状態を保っているが，この状態を人間の精神活動になぞらえると，空の領域に代表される「思考」や「理性」の働きと，海の領域に代表される「情緒」や「身体性」の働きが互いに拮抗している様子と見ることができ，それぞれの領域の割合や力の度合い，均衡関係は描き手によってそれぞれ異なるものと考えられる．今回の例でいうなら，空と海の描画面積を占める割合や力関係には目立った変更はなく，「思考」や「理性」の働きが重んじられ，またこれによって「知」・「情」全体のバランスを保つような有り様は，20 代から 30 代という年代においては特に変わりはなかったと考えられる．

青年期・成人期においては「空の優位」がより一般的であることは先行研究でもすでに指摘されており[8]本研究にご協力いただいた方々においても同様であったと考えられる．10 代後半より，どちらかといえば合理性を重んじて理性で人生をわたってきた人が，急に情緒的側面を主として動き出すという変化は，本人が意識的に変化を望んだ場合にはまだしも，自然な変化としてはやや考えにくいようにも思われる．空と海の上下のバランスは，今回のように長い時間が経過した場合においても，保持される可能性が指摘される．

一方の水平軸については，表 2 を見る限りでは数の変動が見られ，バリエーションが豊かな印象を受ける．事実，臨床場面において繰り返し本テストを使用する際，左・右・中央の強調の変化はよく観察される．上下の比率は変わらなくても，左右の強弱が変化する例は多く見られ，ここでも同様の現象が起きているのではないだろうか．

表 2 および表 3 によると，1 回目では「強調なし」の出現率が最も高く，それに続いて「中央の強調」が見受けられる．2 回目では「右側の強調」に続き，「強調なし」「左側の強調」がそれぞれ見受けられる．グリュンワルドなどが提唱する「空間象徴」の仮説をベースに考えると，1 回目の施行時においては，右の世界（外界・社会）も左の世界（内面世界）のどちらも，特に意識されている様子はなく，あるがままに描画空間に漂っている様子が伺える．1 回目ではこうした「強調なし」の特徴に続き，「中央の強調」が見られるというのが興味深い．「中央の強調」は，1 回目の施行時に示され，2 回目では皆無となるなど，特徴的な動きを示している．このことは，「中央の強調」がしばしば，青年期で「自分とは何か」を探して居る時，あるいは見出したばかりのときによく登場することと関連があるのではないだろうか．くしくも 2 回目の施行時には，調査協力者はみな 30 代を迎え，社会人としての落ち着きと，ある程度の自由や自信を得た段階にある様子が，テスト施行後のやり取りの中で垣間見えた．かつてのような「自分探し」は既にテーマから退き，結果，純粋な自己アピールの表現ともとれる，「中央の強調」の表現は減少したのではないかと考えられる．

なお 2 回目の施行時には「右側の強調」が主として見受けられるが，今回の調査協力者のほとん

どが，社会人としての生活を営んでいる方々であり，テスト施行後のインタビューにてそれぞれの持ち場で日々奮闘している様子が伺えたことから，広く社会に関心が注がれており，社会的な価値観を重んじる態度や，社会の中で目標を定めて頑張る姿がそこに映し出されていたのではないかと考えられる．加えて，「左側の強調」が 2 回目の施行で初めて表現として登場することも興味深い．左側とは，描き手の内面世界，内的価値観を重んじる領域であるが，30 代を迎えた今，表現として増えているということは，自分の在り方や世界観を大切にしながら日々の生活を営んでいる態度の表れではないかと考えられる．

d）「付加物」について

付加物についてはそれぞれ，自然物と人工物の 2 種があるが，教示通りに描画を行い，付加物を一切置かないひとも多く見られる．

今回，研究の対象となった方々においては，1 回目で付加物を描いていたひとが 2 回目で描かなくなるという流れの変化は見られず，1 回目も 2 回目も付加物を描くケースと，2 回目に初めて付加物を描くケースのいずれかに分類されることが分かった．なお自然物では海産物や砂浜・陸地が多く，人工物はビルや船などが挙げられる．

e）筆跡とアイテムの属性について

筆跡については本来，詳細な分析が必要となるが，ここでは「星」と「波」のアイテムに注目し，それぞれのテーマの属性にあった描かれ方をしているかどうかについて，その変遷を追った．

たとえば星を描く際に，星の属性をよく理解し，自らの体験が伴って描かれている場合に，鉛筆をまっすぐに立てて描く筆跡が見られると考えられ，また波を描く際には鉛筆をななめにして描く筆跡が適当と考えられる[21]．したがって本研究では，アイテムの属性にふさわしい筆跡が用いられた場合を「適合」とみなし，それ以外については「不適合」と分類して，筆跡表現の特徴について整理を行った．

表 6 を見ると，星を描く描線が 2 回目ではすべて「適合」へと変化していることが分かった．描き手が 20 代から 30 代へと移り変わる年月の間に，ものの考え方が夢見がちな傾向が見られたり，感傷的（センチメンタル）になりやすいといった傾特徴から，より現実的で建設的なものへと変化したこと，また青年期の時代にくらべて方向性に迷いが少なく，自信をもって何事にも取り組んでいる態度に由来するのではないかと考えられる．年代に伴い，こうした考え方やアイディアは，ゆっくりと変化していくのではないかと想像される．今後，再び変動が見られるのか，注目される．

表 6．アイテムと筆跡のマッチングについて

（単位：人数）

筆跡		1回目（1999）	2回目（2010）
星の描写	適合	4	6
	不適合	2	0
波の描写	適合	2	3
	不適合	4	3

一方，波を描く描線については，11 年の歳月を経てしても，適合と不適合が概ね半々に分かれており，1 回目で適合だったものが 2 回目で不適合を示すほか，その逆のパターンもみられるなど，流動的で揺れ動く傾向があるようである．臨床場面において本テストを繰り返し施行する際にも，波を描く筆は，適合と不適合を行ったり来たりする印象があり，回復過程にあり，一度は適合を示したとしても，またある局面で葛藤を抱えると再び不適合を示すといった動きがしばしば観察される．星を描く筆跡と比較すると，波を描く筆跡は，“今ここで”の情緒的側面の揺れ動きが筆跡の「適合」「不適合」に素直に反映されると考えられる．そもそも感情や情緒というものは，常に揺れ動く性質をもち，一瞬たりとも静止してはいないものだと考えられるので，今回の結果が示すことは，こうした感情や情緒の性質が，本テストの波の表現によく表れてくることの証拠ではないかと思われる．したがって波の表現には，その時その時の描き手の状態が現れては消え，というさまを，繰り返し映し出しているのではないかと考えられる．

4.1.3. 星と波描画テストの結果についてのまとめ

11 年のインタバルを経た再施行の結果，第一に情緒表現の豊かな描画へと変化したことが挙げられた（「絵の分類」）．また，外側からの押し付けではなく，自分自身のルールやペースに従い，主体的に自由に動けるように変化していること（「空間構造の形式」「付加物」）も挙げられる．理性と感

情の働きの比重にはあまり大きな変化が見られない一方で，自分探しのテーマや，内面世界と外的世界への関心の強弱については，その時々の状況に応じて変化する様子が伺える（「空間の象徴的な使い方」）．なかでも筆跡の特徴をみていくと，波の表現は変化に富んでいる様子が見受けられた（「筆跡」）．

したがって本テストは，作者 Avè-Lallemant が指摘するように，描き手の流動的な状態像をその都度映し出す働きを担うばかりでなく，描き手における比較的安定性の高いパーソナリティ要素についても反映する可能性が示唆された．

4.2. ロールシャッハ・テストの結果について

4.2.1. ロールシャッハ・テストの視座について

本研究における調査協力者全体の特徴を把握するために，ロ・テストにおける幾つかの代表的な指標のうち 6 つの変数を用いて，ラフ・スケッチを試みたい．表 7 は，星と波描画テストとの比較を前提とし，本研究の調査協力者の全体傾向を把握するために有用と判断された 5 つの変数が示されている．なお 1 回目と 2 回目の両群の間に見られる値の差について，t 検定の結果，有意水準 5%以下で，Lambda の値に限り，有意な差が認められた（ t (5)＝2.871, p ＜.05）．

表 7．ロールシャッハ変数比較

変数	1回目（1999）	2回目（2010）	t値(注3)
反応数（平均／SD）	39.67／24.09	30.83／7.47	0.870
平凡反応数（平均／SD）	5.83／2.93	6.33／1.97	0.745
X＋%（平均／SD）	0.38／0.13	0.50／0.07	1.808
Afr（平均／SD）	0.47／0.06	0.44／0.08	0.941
Lambda（平均／SD）	1.47／0.97	0.59／0.35	2.871**

（注3）t検定による有意差　***p＜.01　**p＜.05

a）反応数（R: Reactions）

反応数は 10 枚の図版に対する反応の数にあたるが，生産性，資質の豊かさ，テストへのモチベーションの高さ，課題への取り組みの真面目さなどが反映されると考えられる．中村（2009）[22]によれば，国際比較データにおける平均値は R=22.5（SD＝7.90），また日本人データにおける平均値は R=26.25（SD＝9.97）であるが，表 7 を見ると本研究の協力者の 1 回目は R=39.67, 2 回目は R＝30.83 を示しており，いずれも平均を大きく上回っている事が分かる．これは協力者がいずれも高学歴（大学卒業もしくは大学院修士課程修了）で資質の豊かさが指摘されることや，好奇心旺盛で研究参加へのモチベーションが高かったことなどに由来するものと考えられる．

b）平凡反応数（P: Popular Responses）

平凡反応とは，およそ 3 つのプロトコルに一つ以上の確率で生じる反応という基準で定義された，著しく高い頻度で出現する反応のことである．包括システムでは計 13 個と定められている．なお，国際比較データにおける平均値は P=5.36（SD＝1.84）であり，日本人データにおける平均値は P=5.43（SD＝1.70）であり[22]，表 7 をみると，本研究の協力者は概ね平均水準であることが分かった．したがって，手掛かりが明確な時に慣習的なやり方で対処すること，すなわち，社会的慣習に準拠した方法で対応するという意味において，常識的な振る舞いを持ち合わせた群であることが示された．

c）現実検討能力（X＋%: Conventional Form Use）

良質な現実検討能力の目安として X＋%を用いて検討したところ，国際比較データおよび日本人データにおける平均値が X＋%＝0.52（SD=0.13）であるのに対し[22]，本研究の協力者の 1 回目は X＋%＝0.38（SD=0.13）と 1 SD 以上低い値を示し，2 回目では X＋%＝0.50（SD=0.07）と概ね平均水準を示している事が分かった．1 回目のテスト施行時には，調査協力者はみな 20 代前半の青年期の学生であり，年代的な特性として，様々な刺激によって心が翻弄されやすく，現実吟味がやや乏しい状態にあるように見うけられたが，2 回目の施行時には内的安定性を獲得し，良質な現実検討能力が培われた様子が見受けられた．経験を重ね，成長を遂げたことに由来する変化ではないかと考えられる．

d）感情の比率（Afr: Affective Ratio）

感情体験が刺激され賦活される場面（Ⅷ図，Ⅸ図，Ⅹ図）に，肩の力を入れずに気楽に対応し自然と過ごせるのかについて Afr を目安として検討を行った．国際比較データにおける平均値は Afr=0.53（SD＝0.20）であり，日本人データにおける平均値が Afr=0.51（SD=0.18）であるのに対し[22]，本研究においてはいずれもより控えめな傾向

が伺える（表 7 参照）．どちらかといえば感情刺激とはすこし距離をおくことで調整を図り，屈託のない感情表現はやや控えめな傾向が示されているのだろうと考えられる．

e）ラムダ（L: Lambda）

ラムダとは，純粋形態反応（F）の割合を示す値である．純粋形態反応がロ・テスト反応全体の半分を占めるということは，個人的な思惑や感情を交えずに，客観的かつ表層的に物事を把握しようとする傾向がみられるという解釈となるが，藤岡（2004）[23]も一部指摘するように，日本の文化においては従来的に馴染みのある適応スタイルのひとつとも考えられる．国際比較での平均値は L=0.86（SD＝0.95）であり，日本人データも L＝0.86（SD=0.84）であるなど，ほとんど差がみられない点が注目される[22]．本研究においては，1 回目の群の平均が L＝1.47（SD＝0.97）と高い値が示されているが，2 回目になると L＝0.59（SD=0.35）と変化を遂げており，統計的に有意差が認められている．つまり 11 年という歳月の間に，それぞれがより個性的な振る舞いに開かれて，個人的な感情や考えも臆することなく表明する態度へとゆるやかに様変わりしたのではないかと思われる．本研究の健常群に見られる大きな特性の一つと言えそうである．

f）体験型(EB: Erlebnistypus)

表 8 には，体験型の推移が示されている．体験型とは，ロ・テストの作者ヘルマン・ロールシャッハによって考案された分析指標であるが，パーソナリティのタイプに関する情報を与えてくれる点で，臨床的に有用な指標である．決定や判断に際し，主に思考を使うのか（＝内向型），感情を使うのか（＝外拡型），それとも一貫したスタイルを持たないのか（＝不定型）に選別される．これにラムダの値が高い回避型が組み込まれ，現在では内向型，外拡型，不定型，回避内向型，回避外拡型，回避不定型の全 6 種に分けられているが[24]，本研究では議論をよりわかりやすくするために，回避内向型，回避外拡型，回避不定型をすべて「回避型」とひとまとめにし，検討を行いたい．回避型とは先述のラムダの値が高い一群を示しており（L≧ 1 .0，ハイラムダ・スタイル），彼らはたとえベースに内向型・外拡型・不定型といったスタイルがあったとしても，これらの特徴はすべて覆い隠され，どちらかといえばみな一律に「ハイラムダ」の特徴，すなわち自分自身を含まない表面的でよそよそしい回避的な振る舞いを見せる点で特徴的といえる．したがって，本研究ではこれら 3 つの体験型を便宜上「回避型」として扱い，議論を進めることとする．

表 8．体験型の比較

（単位：人数）

体験型	1回目（1999）	2回目（2010）	χ^2値（注4）
内向型	1	3	1.500
不定型	0	2	2.400
外拡型	0	0	—
回避型	5	1	5.333**

（注4）χ^2検定による有意差　***p＜.01　**p＜.05

表 8 を見ると，外拡型は 1 回目 2 回目を通じて一人もおらず，1 回目は内向型と回避型の該当者のみである事が分かった．11 年後の 2 回目の施行の際，回避型すなわち「ハイラムダ・スタイル」を脱却し，内向型もしくは不定型に落ち着く人が複数見受けられた．なお χ^2検定の結果，回避型は 5 名から 1 名へと明らかに減少している事が分かった．経験的にはある程度長い期間においても保持されると想定されてきた体験型であるが，必ずしも治療的介入により回復に至った臨床例でなくとも，動く場合があるということは注目に値する結果である．また，回避型という個人的な感情を含めない淡々としたあり方から，じっくり考えて解答に至る内向型や，場当たり的に時に考え時に試行錯誤する不定型へと，少しずつ時間をかけて，よりオープンで積極的なあり方へと互いに分化していった様子がうかがえる．かつては省エネな関わりを外界との間で確保していた人が，11 年もの年月の間に，他者の世界に開かれ，心が柔軟に動き出すことで豊富な体験が積み重なり，30 代に至ったのではないかと考えると，パーソナリティの成長や成熟といった観点からも興味深い結果である．

4.2.2. ロ・テストの結果についてのまとめ

11 年のインタバルを経た再施行の結果，本研究の対象となった群は常識的であり，且つ生産性が非常に高い一群であったことがロ・テストの結果

から明らかとなった（反応数）．1 回目の施行が行われた 20 代のころは，内的安定性がやや乏しく，ものの見方も曖昧で，やや主観的な偏りがあるといった青年期らしい特徴が見受けられたが，2 回目の施行では，年月を経てさまざまな経験を重ねることで，全体的に良質の現実検討力を養ってこられたように見受けられた（反応数，現実検討能力）．そのほか情緒体験については，そもそもあまり気楽で居られる性質ではないようで，どちらかといえばやや距離を置く傾向があり，遠慮がちなところが当初より見受けられた．しかし 2 回目の施行時には 20 代のころに見られた“よそよそしさ”は影を潜めて，他者との関わり，そして自分自身との関わりによりオープンになってきた印象が見られ，11 年という歳月をかけて少しずつ変化が形になっていったのではないかと想像された（感情の比率，ラムダ，体験型）．また環境や外側のルールに表面的に順応し，受身的に縛られるのではなく，自分自身の軸を頼りに主体的に物を見たり判断したり，表現できるようになっていたことも変化の一つと考えられる（ラムダ，体験型）．

従来，ラムダ，体験型といった指標は，臨床例のように治療的介入による変化が見込まれるような特別な状況以外では，しかも健常群においては変化しにくいものと考えられているが，今回のように，11 年にわたる長いインタバルと，さらに 20 代から 30 代という節目であったからこそ，パーソナリティの重要な要素ともいえる部分に，変化が見受けられたのではないかと考えられ，パーソナリティの仕組みを考える上で貴重な知見となった．

4.3. 両テストの重なりから見えてくること

臨床的妥当性のあるロ・テストの知見をたよりに，本テストの結果を改めて見ていくと，主に以下の 2 点において，両テストの見解が重なり合うと考えられる．

①世界との関わりに積極的な態度を獲得

本テストの「絵の分類」における変化として認められた，“その人ならでは個性的で豊かな表現が表れ世界との関わりに積極的になってきた”という見解が，ロ・テストに見受けられた“自分自身を含まない表面的でよそよそしい回避的な振る舞いを脱却し，世界に対してオープンで積極的な態度を示すようになった”という一連の変化についての見解（「ハイラムダ」の減少，ないし体験型における「回避型」の減少）との重なりを見せている．

本テストの「絵の分類」にしても，ロ・テストの「ラムダ」および「体験型」にしても，経験上，いずれも容易に変化する性質のものではないだけに，本研究で見受けられた著しい変化には，注目すべきものがあると思われる．

今回のケースはみな健康な成人であり，治療的介入を受けたケースではないため，これらの項目における変化の可能性は低いだろうと当初思われていた．しかし今回のように 11 年という長い年月にわたる，しかも 20 代から 30 代という，現代人にとって社会人経験を積み上げるまさに激動の時代の前後に施行された両テストの結果であったからこそ，これだけの動きが見受けられたのではないかと考えられる．

ところで，そもそも「絵の分類」は，描画を解釈する際に最も重要な鍵となる“全体印象”と直結しているだけに，描き手の中核的な要素が反映されている可能性が高い項目であり，臨床例は別としても，左右差や筆跡に比べて変化が鈍いものと考えられる．そして本研究において「絵の分類」の見解との重なりを見せたロ・テストの「体験型」は，パーソナリティのタイプを語る重要な指標の一つであるだけに，ロ・テストの臨床的妥当性を根拠として考えると，本テストもまたパーソナリティのタイプを一部反映し得るツールであるとの仮説が十分成り立つと言えるだろう．具体的には，「絵の分類」における「要点のみ」の表現と，「体験型」における「回避型」のあり方は，“等価”とは考えられなくとも，ある程度以上の“関連性”が示唆された．

②社会のルールに従順で杓子定規な態度から，自分のペースを重んじ柔軟な態度へと変化を遂げた

本テストの「空間構造の形式」における「規則性」の表現が 2 回目においては消失していたことから，杓子定規で堅苦しい態度から解放されて描き手由来の本来のペースやルールに従って柔軟に対応する力を獲得したと認められた．一方，ロ・テストで示された高水準の「ラムダ」が，2 回目には平均水準以下にまで落ち込んだことから，11 年という歳月の間に杓子定規で没個性的なあり方から，それぞれがより個性的な振る舞いに開かれて臆することなく表明する態度へと変化したと認められている．本テストのこうした一連の変化についての見解が，臨床的妥当性を有するロ・テストとの重なりを見せていることから，本テストの「規則性」の有無について仮説については，ある

程度以上の妥当性が支持されたと考えられる．すなわち，本テストの「規則性」の消失についての見解と，ロ・テストの「ラムダ」の減少との間に，ある程度以上の“関連性”が示唆された．

以上，本研究では上記 2 点の見解について，本テストの解釈仮説が広がる可能性を示していると考えられる．

５．考察

星と波描画テストが，パーソナリティの何を映し出すのかという問いに対し，描き手の一時的な状態像を映し出す働きを担うばかりでなく，描き手における比較的安定性の高い，場合によっては中核的とも考えられるパーソナリティ要素についても映し出す可能性が，本テストの過去データとの比較照合を通じて示唆された．

この結果を踏まえて，両テストの見解に共通点が見受けられるのかどうかを検討したところ，「世界との関わりに積極的な態度を獲得」したという点と，「社会のルールに従順で杓子定規な態度から，自分のペースを重んじ柔軟な態度へと変化を遂げた」の 2 点において，両テストの見解が共通することが明らかとなった．これらはいずれも世界に対する態度や振る舞いに関する見解だが，ロ・テストでは，パーソナリティのタイプについて情報を与える重要な指標の一つである「体験型」の仮説がこの見解の根拠であり，本テストでも描画解釈の要ともいわれる全体印象と直結した分類項目（絵の分類）がこの見解の根拠となっている．臨床的妥当性を有するロ・テストと共通の見解を，本テストが反映しているという事実から，本テストが状態像の変化ばかりでなく，パーソナリティ要素の変化を捉え得るツールであるとの仮説が十分成り立つのではないかと考えられる．基礎的研究と臨床実践の両側面により，今後も引き続き検証を進めていきたい．

本研究では，6 名という小集団を対象に分析を進め，いくつかの知見が得られた．しかしデータの性質上，これ以上多くの調査協力者の獲得は難しく，統計的手法を用いた詳細にわたる数量的な検討も困難なのが現状である．そこで本研究の結果を踏まえて，新たに“ケース・スタディ”に類する視点からの質的検討，すなわち個別の知見を積み上げる方向で本テストの性質を描き出す方法を選択し，研究を継続していきたいと考えている．具体的には，両テストの総合所見を書面にまとめ，複数の評価者のもと，所見上の文章表現の重なりを質的に検討することで，本研究で得られた結果を支持する知見が得られるのではないかと考えている．さらに，両テスト施行後に行われたインタビュー・データも参考資料として加え，質的研究の積み上げを今後の課題としたい．

ところで，星と波描画テストの分析項目に変化が見られず，20 代から 30 代にかけての 11 年の間，描画特徴がほぼ保持されているケースが 1 件あり，この場合，ロ・テストも同様に変化が少ないことが分かった．一方，このケースとは対照的に，星と波描画テストのすべての解釈項目において変化が見られた例が 1 件確認されており，こちらのケースではロ・テストの著しい変化が認められた．いずれのケースも，その特徴は際立っており，描き手の性質について迷いの少ない確かな記述が可能になるだろうと予想される．したがって，今後これらのケースを手掛かりとして，両テストの重なりを調べ，星と波描画テストの性質に光を当てていきたいと考えている．

最後に，本研究を通じて得られたデータは，20 代から 30 代という人生の活動期を経た健康な成人におけるパーソナリティの成熟のプロセスを考える上でも，大変貴重で興味深い資料である．これから先 40 代，50 代への変化に向けて，“パーソナリティの発達とは何か”をテーマに，追跡調査に努めたい．

謝辞

調査協力者の方々に心より感謝申し上げます．なお，ケース理解においてご助言をいただいたブルーノ・リーネル先生（ISAP ユング心理学研究所），またスーパーヴィジョンをご担当いただいた中村紀子先生（中村心理療法室）に，深く御礼申し上げます．

付記

本研究は大妻女子大学「戦略的個人研究費」（S2610）の助成（平成 26 年度）を受けたものである．

引用文献

[1]Avè-Lallemant, U. *Der Sterne-Wallen-Test*. Ernst Reinhardt Verlag, Munchen/Basel., 1979
（小野瑠美子訳．星と波テスト．川島書店. 2003）
[2]小野瑠美子．年齢退行法による＜星と波テスト

＞のカタルシス効果．日本催眠医学心理学会大42 回大会発表抄録集 1996, 9 月 8 日 - 9 日
[3] Rhyner, B. Projective drawing-Test as a Follow-up Tool in Psychotherapy. Bulletin of Kyoto Bunkyo Center for Clinical Psychology, 1997, 34-44
[4] 小野瑠美子．星と波の世界への招待．SWT-JAPAN, 1998
[5] 杉浦京子ほか．星と波テストの日本における試み　安田生命社会事業団研究助成論文集, 1998, 34, 96-103
[6] 香月菜々子ほか．星と波テストのパーソナリティ・テストとしての独自性について　ー「不適応」の見解をめぐっての，ロールシャッハ・テストとの比較を通じてー．上智大学心理学年報, 2003, 27, 73-85.
[7] Yalon, D. The Star-Wave Test across the life span: advances in theory, research and practice. International Graphological Colloquium, Canada, 2006
（杉浦京子監訳．星と波描画テストの発展　理論・研究・実践：アクロス・ザ・ライフスパン．川島書店. 2015）
[8] 香月菜々子．星と波描画テスト 基礎と臨床的応用．誠信書房, 2009
[9] 鈴木純一．「迷路」課題の誤謬から見た子どもの衝動性に関する研究ー星と波テストとの比較からー．東洋英和女学院大学大学院　人間科学研究科修士論文, 2011（未刊行）
[10] 杉浦京子ほか．投映描画法テストバッテリー．川島書店, 2012
[11] リーネル B.ほか．星と波テスト入門．川島書店. 2000
[12] 香月菜々子．星と波テストの解釈仮説の提言．上智大学大学院文学研究科心理学専攻修士論文．1999（未公刊）
[13] 傍士一郎．「星と波テスト」の人格診断テストとしての可能性．山口大学心理臨床研究, 2002, 2, p.61-70
[14] 林潔．抑うつ傾向と信念・施行様式および星と波テストとの関連についての一考察．白梅学園短期大学紀要. 2002, 36, p.79-89
[15] 稲田雅美．描画テストにおけるあそびの要素星と波テストへの一考察．同支社女子大學學術研究年報. 2004, 55, p.25-31
[16] Frank, L. K. Projective methods for the study of personality. *Journal of Psychology.* 1939, 8, p.389-413.
[17] 香月菜々子．星と波描画テストに移る情緒体験の様相ーロールシャッハ・テストとの比較を通じてー．大妻女子大学心理相談センター紀要. 2013, 9, 10, 25-39
[18] Bolander, K. Assessing Personality Through Tree Drawing. Basic Books Inc., 1977
[19] 青木健次．描画法における全体印象について．京都大学教育学部紀要. 1980, 26, p.129-140
[20] 香月菜々子．星と波描画テストにおける“回復サイン”仮説の提言．日本芸術療法学会誌．2006, 37, p.39-56
[21] 投影描画法テスト研究会編．投影描画法テストバッテリーセミナー2005．＊リーネル氏のコメントはこのセミナーにおいてなされたものである
[22] 中村紀子．海外のロールシャッハ事情．包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌．2009, 13(1), p.2-25
[23] 藤岡淳子．包括システムによるロールシャッハ臨床ーエクスナーの実践的応用ー．誠信書房．2004
[24] Exner, J. E. A primer for Rorschach interpretation. Rorschach Workshops. 2000
（中村紀子ほか訳．ロールシャッハの解釈．金剛出版. 2002）

Abstract

This study attempts to determine the further features of the Star-Wave Test as a projective method, by investigating the test results from the second administration which had been taken after 11 years of the first administration. It provided us with some ideas that the Star-Wave Test is likely to describe people's mental states which may easily change in the very short term, and also the long-lasting states which we call "the personality" in general. Furthermore, by comparing the results of the Star-Wave Test and that of the Rorschach inkblot test, it was discovered that both projective methods give the similar descriptions about some change in subjects' character in the long term. It can be explained that the Star-Wave Test is also likely to detect the personality change, according to the clinical validity of the Rorschach inkblot test.

（受付日：2015 年 6 月 29 日，受理日：2015 年 7 月 8 日）

香月　菜々子（かつき　ななこ）
現職：大妻女子大学人間関係学部人間関係学科（社会・臨床心理学専攻）准教授

上智大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程修了.
専門は臨床心理学．現在はパーソナリティ・テスト（投映法）を中心に，その解釈と対話促進的なフィードバックに焦点をあてた研究を行っている.